

展示作品について ～アーティストインタビューより～

中村竜治

《無関係》について

今回、椅子を2脚と柱を2本展示しています。椅子の一方は波をモチーフにしていて、紙の板を波状に曲げ、それを積層させてつくっているのでもろんな波模様が見えてくるようになっていきます。もう一方は水面をモチーフにしていて、格子状の構造体に色鉛筆で6色に着色したので、見る角度によって色が移ろうようになっていきます。柱は展示室のニュートラルで均一な空間に対して特徴を加えるようなものにしました。この建物の構造であるかのように太さやしつらえを合わせて作っています。1年目には壁をつくり、2年目にはロープを張りましたが、それらは作品と鑑賞者あるいは作品と作品の関係を積極的につくろうとするものでした。最後の年となる今回の柱は、関係を積極的につくるものというよりは、ただそこにあるもの（つまり無関係なもの）としてつくりました。そのような柱に対して他の作家や鑑賞者は何を感じ、どんなリアクションをとるのか？ 関係が生まれるのか生まれないのか？ 生まれるとすればそれはどんな関係か？ そんな試みです。

柱と椅子の関係について

椅子はそれぞれ柱の付近に置けていますが、柱は展示物というより椅子の背景として空間側に属するものとして存在し、それを強調するものとして椅子があります。椅子と柱は展示物と空間という関係で、その2つでひとつの作品となっています。建物の床、壁、柱などは普段見慣れているのでなんでもないもののように感じますが、実際にはそこで劇的なことが起こっているのではないかと感じていて、意識して見るとすごく面白い存在だと思っています。そのような空間に対する意識を、訪れた人に喚起するように展示しました。個々を単体としても楽しんでもらいたいのですが、同時に、全体としては空間をテーマにしているので、展示とは無関係でありながらも、ある意味で展示と関係し影響を与えてしまう空間というものを、柱を通じて味わってもらえたと思っています。



《無関係》2023

ミヤギフトシ

《光を受けきらめく金色のペン先を、私は波のように走らせる》、《Banner (from Ondine) #1-5》について

2021年のちょうど椿会と重なる時期に『幾夜』という小説を書いたので、それをベースにこれまでいろいろと考えてきました。1年目、2年目は、小説のなかで夜の時間を共有した2人の登場人物の親密な関係性と、その2人が離れ離れになり、隔たりを介して手紙を交わしたり関係性を築いくことをテーマにインスタレーションや刺繍作品などを作りました。今回、その続きとして写真に刺繍をした作品を作りました。

踊り場の作品《光を受けきらめく金色のペン先を、私は波のように走らせる》は、1年目からインスタレーションの一部や映像の中で使ってきた、オノトという万年筆を今回も使い展示しています。手紙や文章、物語がテーマとしてあったので、テキストが糸になってつながっていく、その導入のような作品を作りたいと思い、「オンディーヌ」の詩の最初のフレーズを用いました。下の展示室の作品《Banner (from Ondine) #1-5》には、その続きの断片的な詩を並べました。

「オンディーヌ」は、『幾夜』のなかで、2人が聴いていた音楽のひとつとして登場します。その元になっているのはアロイジウス・ベルトランの詩で、オンディーヌは水の精として描かれています。彼女が、ある夜男の家に行き、窓を介して求婚するのですが、彼が断わると、オンディーヌは高笑いをあげ窓に水しぶきをぶつけ消えていくという物語です。そのしたたかさや、彼女がまた戻ってくるかもしれない可能性、夜の音楽としてもすごく好きだったので、今回作品に使いました。

写真はすべてピンホールカメラで撮っています。ピンホールも黒い紙に針で穴を開けることでイメージが浮かび上がってくるところや小さい穴から見える世界／風景が、刺繍するときに針に糸を通して言葉を紡いでいくということと同じという感覚になり、今回このような作品にしてみました。写真に刺繍をするのは初めてです。

海をモチーフにしたのは

小説では、離れ離れになってしまった登場人物が海に行きその向こうにいる誰かを想像するというシーンで終わるのですが、そのシーンを写真に撮って作品にしたいという思いがありました。今回は、その物語の舞台や、実家がある島の海や、目 [mé] さんの作品《景体 2#2》を撮影したのですが、想像上の海にも目を向けたりと、自由にやってみました。

「放置」について

「放置」に近いと思うところは、小説の最後のセリフに、「光を受けてきらめく金色に輝くペン先を私は波のように走らせる」という言葉あって、書いたときはなんとなく情景をイメージしていたのですが、書き終わって改めて見てみると、「これってどういう意味何だろう」と自分でもわからなくなっていました。「椿会」の回を重ねるたびにそのフレーズを思い出していたのですが、今回ピンホールカメラで海の写真や映像を撮っているときに、ざらついた風景の中に波が光を受けているのを見て、そのフレーズと目の前のイメージがつながる気がして、その情景をここで作品にしてみたいと思いました。



《光を受けきらめく金色のペン先を、私は波のように走らせる》 2023



《Banner (from Ondine) # 1》 2023



《Banner (from Ondine) # 2》 2023



《Banner (from Ondine) # 3》 2023



《Banner (from Ondine) # 4》 2023



《Banner (from Ondine) # 5》 2023

宮永愛子

《message (2019/2021/2022/2023)》について

2021年から3回とも出品しているのですが、最初は2019年に資生堂のウィンドウに展示したもので、作品の変成は資生堂の時間の中でだけ成長・記録しているので、時間のような役割を果たすと思っています。

《海の頂^{いただき}》、《詩を包む - ホワイトローズ -》、《深い眠り／あさい目覚め》について

昨年、たまたま資生堂ギャラリーのそばの花椿通りの道路工事で地中を掘っているタイミングに居合わせ、この場所の昔の土や煉瓦を手に入れることができたので、それを使ってガラスを作りました。私たちが普段目にする現在の銀座の整った場所とは違う時間軸を発見したので、その時間と触れ合うようなことがしたいと思いました。今回は去年つくったガラスの素材を使って香水瓶を作りました。それを、どういふきさつでどのように出てきたのかということも見せたいと思い、わざと床に置いて展示しています。

1年くらい前から、いろいろな存在の始まりを探求しているなかで、香水をいつまでも残しておくことはできないけれど、たとえば石の中に香水をとっておくことができるのではないかと考えていました。《詩を包む - ホワイトローズ -》は、溶解したガラスのなかに香水を含ませた石を置いて焼成した作品です。すると香水が持っている水分が蒸気となって外に出ようとするので、それが空洞になってガラスに包まれる状態が残ります。香水には色はないのですが、溶解するなかに閉じようとするその成分によって色が残り、そのような痕跡と一緒に香水の空気を残すことができたので、それを作品としてみせたいと思いま

した。

「放置」と「無関心」について

今年のテーマは「放置」と「無関心」ですが、展示ができあがってみると、「無関心」で「放置」していたはずなのに、こんなに呼応し合うなんて、分かってはいたけど、なるほどと思うことばかりです。テーマに合わせてなるべく関心を持たないようにしていましたが、何度か展覧会を一緒に開いているうちに、なんとなく他の作家さんが考えていることや、好きそうなことがわかるようなところがあって、それは、言葉をたくさん交わさなくても、作品設置の際にも、この人はここに置いたから次はこんな感じ、というようなことを他の作家さんも自然に感じていたのではないかなと思います。



《message (2021/2022/2023)》
2023



《海の頂》^{いただき} 2023



《詩を包むーホワイトローズー》
2023



《深い眠り／あさい目覚め》
2023

Nerhol

《Aloe arborescens》、《Oxalis triangularis》、《Lycoris radiata》、《Amaranthus retroflexus》について

今回、「放置」と「無関心」のテーマをそのまま作品にするのではない方法を考えたいと思い、それぞれ作家さんにインタビューすることにしました。他の作家さんたちが何を考えているのかなど、この3年間で聞きたいことがたくさん出てきていました。作家さんに会いに行き話をしたときに、展覧会の打ち合わせや、作品を展示しているときは全然違う話ができたと、教えてもらうことがたくさんありました。はじめはそのインタビューした動画から作品をつくらうと思っていたのですが、作家さんを訪問した場所でつけたさまざまな植物や景色、いろんな環境に肌でふれたことから、それぞれの作家さんのスタジオ近くで撮影した植物の動画を使って作品をつくることにしました。

撮影した植物はすべて帰化植物です。1年目も2年目もずっと自分たちは帰化植物をテーマに作品を制作しています。帰化植物は、何気ない、想像もしていなかった無関心の場を見渡したときに初めて見つけた存在でした。今回そういうつもりはなかったのですが、各作家さんの場所でもかならず見つけることができました。残念ながら杉戸さんだけインタビューで

きなかったのですが、ちょうど杉戸さんが今回ジャガイモ・サツマイモをモチーフに作品を作られていて、それらも帰化植物で
すし僕らがつくる必要はないかということになり、このようなかたちにまとめました。

スタジオ訪問について

1 年目、2 年目は、作家同士が密接に関わり合いを持ちづらいう状況下で、ある意味相手を想像したり、空気を読みながら、狙っていたわけではないけれど最終的に、何かしら空気感のある空間が出来上がりました。今回、3 年目で最後の
稽会になり、ようやくフィジカルにいつでも会える状況になったので、まず会って話をしてコミュニケーションとってみることから始めようということになりました。実際に会ってみると、展示に関すること以前にいろんな面白い話が聞けて、興味関心がふくらんでいくなかで、初めにテーマとして掲げた「無関心」の背景には尊いものが存在していることに気づき、それを自分たちなりに表現してみました。

作品の設置場所について

今回、それぞれの作家さんの作品の近くに自分たちの作品を置いています。導線のなかで、なるべく他の作家さんの作品が目についてから自分たちの作品がある、というなかたちに見えるように設置しました。作品も大きくせず、初めてこの小さいサイズで作ってみたというのも、設置場所のことを考えてのことでした。

今回、3 回目で一番距離感のある展示だと思いました。テーマのせいかもしれないですが、一番空間が使えている展示のように思えます。



《Lycoris radiata》2023



《Oxalis triangularis》
2023



《Aloe arborescens》
2023



《Amaranthus retroflexus》
2023

杉戸洋

《インナーディスク2》 - 《海と芋》 《さつま芋ランプ》 について

今回が 3 回目ということで、このメンバーと 3 年間つきあってきて、毎回展示会の出だしとしてこの空間に何を置くかというのがなかなか決めにくいところでした。そこで、ひとつルールをつくるのがよいということになり、中村さんが建築家なので、1 回目は壁をつくる、2 回目がロープをひく、3 回目が柱を立てるといふ、これだけ最初に決めました。それ以外に今回は、色々話しているなかで「無関心」という言葉が出てきました。それをどのように表現すればいいのだろうと考えるなかで、「柱」と「無関心」という言葉が頭のなかにあつたので、そこから始めました。その後の打ち合わせで出てきたのが、目 [mé] さんのモノリスのような波三角形。自分からは「無関心」のきっかけになるのではないかと思い、「ミラーボールと」という言葉を出

しました。3 回目となるとオンラインのミーティングに疲れてきたのと、3 年間一緒にいたので、だいたい勘で作品を出し合っ
てやるのが一番いい展示になるのではということかからこんな感じの展示になりました。

作品《海と芋》、《さつま芋ランプ》について

最初は《海と芋》だけ出すことを考えていました。前回ロープのテンションを張るのにこの場所を使ったので、なんとなくここを
引き続き使いたいというのがありました。自分のなかでは杭を打つというか、海とサツマイモが浮いているイメージが直感であ
り、みんなは何を持ってくるかということも想像しながらこの作品を考えました。柱が出来上がったのをみたときに、ちょっと太
かったなというのが正直なところで、もう 1 本柱に対して吊り下げるものがあればそれも和らぐかなと思い、《さつま芋ランプ》
を吊り下げました。

芋をモチーフにしたのは

目 [mé] さんがいろいろ話してくれていたことからイメージが見えてきたのですが、きっかけは海で、ミラーボールが月になる
のかなと思って、潮の満ち引きのことを考えていたら芋掘りのことを思い出しました。満月のときに芋を掘るということから、そ
れだけです。直感で出てきた言葉をそのままかたちにしていくのが今回一番やりやすいのではないかなと思いました。展示の
当日まで、みんなから何がでてくるかわからないので、プレゼント交換のような、そのプレゼントが誰にいくかわからないし、ド
キドキ感のようなものがありました。このメンバーだとどうしても控えめになっていくのか、どんどん引いていって、この 3 回目
が一番縮小した十歩引いたような展示になっているかと思うのですが、それぞれよく見るといろいろ考えられていることも見え
てきて面白い展示になっていると思います。

「インナーディスク」について

このタイトルも直感です。前回、他の美術館で展示させてもらったときにも気になっていた言葉で、それもちょうどコロナの時
で、外に出られないなかでモチベーションを上げていかないといけない、そういう意味かな。自分の家で内なるディスクとい
うことでしょうか。



《インナーディスク 2 海と芋》
2023



《インナーディスク 2 さつま芋ランプ》
2023

目 [mé]

《景体 2#2》、《小さな窓》について

《景体 2#2》は、「遠くの海を近くにみたい」という思いから着想し、景色と物体の間の存在を捉えようとしています。作品は、ある時に興醒めしたり、またある時には陶酔させられるような、どこか見る側の意識が反映されるような側面があります。《小さな窓》は、ぼうっと窓の外を見る人が、会場にほったらかされているように配置される作品です。ぼうっと窓から景色をみている人を、世界の側から見返したようなものになればと思っています。

これらの作品を最終回に出そうと思った理由

今回テーマとして浮かび上がった「放置」や「無関心」から、これらの作品の展開を考えました。ぼうっと景色を眺めている時、圧倒的な世界の前に、たった一人ぼつんとそこにいて、自分自身とこの広大な世界は、どこか無関心に放置されたまま、でも関係だけが存在している。そんな状態。参加作家との長い時間のコミュニケーションから、普段やらないような（時に作品が台無しになるような）展示をしても、「関係」だけが空間に浮かび上がっている、そんな展覧会になっているように思います。



《景体 2#2》2023



《小さな窓》2023